

文化

アート&エンタ

音楽季評

SNSでの感想が刺激に

有馬純寿

すみひさ

2月から3月にかけて関西エリアでは、井上道義／大阪フィルハーモニー交響楽団によるシヨスタコーヴィチ「交響曲第11番ハ1905年V」第12番ハ1917年V」写真II、広上淳一／京都市交響楽団のマーラー「交響曲第8番ハ千人の交響曲V」など、印象に残る公演がいくつも催された。

なかでも井上の大阪フィル首席指揮者として最後の定期演奏会となったシヨスタコーヴィチ・プログラムは、第11番、第12番という重量級かつ渋めの曲目にもかかわらず、多くの観客がフェスティバルホール(大阪市)



写真・飯島隆

に詰めかけた。井上は3年間の総決算というべき細部までよく練られた熱いタクトで臨み、オーケストラもそれに応えるべく高精度かつ濃厚な演奏を聴かせ、終演後は拍手が鳴り止まなかった。その後、楽団創立70周年の記念公演として東京でも演

奏され、首都圏の聴衆にも大きなインパクトを与えたようだ。最近、こうした良い演奏会のあとの楽しみのひとつが、ツイッターなどのSNS(ソーシャル・ネットワーキング・サービス)で来場者の感想を見ることが。終演後まもなく演奏会に関するコメントが投稿されはじめ、それぞれが感じたことをみなストリートかつ丁寧に書き綴っている。この公演でもさまざま

な感想が飛び交ったが、そのコメントを見て東京巡回公演に興味を持った人も多いだろうし、東京公演に行く人にとって、東京公演を知り、楽しみを膨らませるためのよい事前情報になったに違いない。

ネットではひとりよがりな意見や罵詈雑言ばかり飛び交うと言われるが、クラシック音楽の分野では、不思議なくらいそうしたものは少ない。もちろん難点があったコンサートには厳しい意見もでるが、それを含めて我々音楽家にとっては、音楽雑誌の評論以上に参考になることもある。「全体ではいまひとつだが首席オーボエの○○さんのソロは素晴らしかった」など

細部にわたるコメントもあり、演奏家ひとりひとりもうかうかしていられない時代になった。また、従来の名曲オンパレードとは異なる定期プログラムを展開するオーケストラや、企画性の高い公演には、三、四十代の

比較的若いリスナーが少なくないためか、とりわけ反応も多い。今月のアラン・ギルバート／東京都交響楽団によるアメリカの現代作曲家ジョン・アダムズの「シエラヘラサード・2」(『ポインツト・トゥー』と読む。映画ではよくある手法だが、なんとという秀逸なタイトル!)の日本初演もその一つ。ハリウッド映画さながらのドラマティックな曲想とヴァイオリン独奏のリーラ・ジョセフォウィッツの熱演がSNSで話題となり、翌日の公演の集客の一助になったようだ。

すでに多くの音楽団体ではSNSでの宣伝を行っているが、即時性や双方向性などネットならではの戦略を活かした情報発信をしている所は全国的に見ればまだ少ない。コンサートに足を運ぶ年齢層の拡大のためにも、ぜひ力を入れてもらいたい。(音楽家、帝塚山学院大准教授)